



TITLE:

<大會抄録> 『紅史』 著作年次考

AUTHOR(S):

若松, 寛

CITATION:

若松, 寛. <大會抄録> 『紅史』 著作年次考. 東洋史研究 1988, 47(3): 591-591

ISSUE DATE:

1988-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154245>

RIGHT:

化（上價者——民田所有者）を推進したが多くの障害につきあたった。④明の賦役全書に勳戚・王府莊田の記載がなく、その全貌がつかめない。⑤明代の王莊は欽賜田と自置田に分類されるが、明中期以降の民田分割、投獻、置買等の方法による莊田擴大で土地所有權が錯綜したため、王田處理に當り糧・租兼收、變價銀の重複例まで出現。⑥「勢豪・衙蠹・悍將・驕兵・賊黨」による土地占有。清朝はこれらの障害の排除と全主田の把握、變價・租餉銀の徵收を考課・處罰の對象として官吏を督促した。

順治年代の右の結果を、康熙八年清朝は更名田令（既變價地及び未變價地の民田化）としてまとめ、翌九年には自置田の民田化方向を提示した。こうして明朝の掌握できなかった王莊が、清朝權力の賦役徵收體制下に編入（州縣管轄）された。しかし清中期以降まで残る賦役全書内の土地區分「民田・屯田・更名田」の如く、完全な民田化まで多くの課題を内包していた。

『紅史』著作年次考

若 松 寛

ツハルバ・クンガードルジエ (Tshal pa Kun dga' rdo rje) 著
『紅史』 (*Deb ther dmar po* 又は *Hu lan deb ther*) は、稻葉正就・佐藤長兩氏によってその全文の譯注が發表されたことにより（『フウラン・テブテル―チベット年代記』法藏館、一九六四年）、わが國では最もよく知られたチベット文史書の一つとなっている。

『紅史』の著作年次は、譯注者の見解によれば、「一三四六年であることに間違いない」（前掲書、一八頁）と斷定された。しかるに近年この見解を覆す『紅史』の異本が刊行された。この異本では、明らかに一三二三年までの記事が含まれているのである（『紅史（藏文）東嘎・洛桑赤利校注 民族出版社、一九八一年）。洛桑赤列氏の指摘する如く、本書の「カルマ・カーギュ派史」の章にはカルマバ第四世ロールベードルジエ (Rol pa'i rdo rje) の事蹟が詳細に述べられているが、但しその記述は、彼が卯年（一三六三年）に中國内地からチベットへ歸還したことで打ち切られている。この記事が『紅史』全篇中、年代上最も新しいもののなのである。こうした事實に基づいて初めて『紅史』跋文中にみえる著作年次に關する問題の一句「至元二十三年に〔記す〕」に對して、一つの解決策を編み出すことができるというものである。即ち、一三六三年は順帝の至正二十三年に當るから、原文の至元を至正の誤記とみなせばよいことになる。

この他、『紅史』に關する二、三の問題點を指摘してみたい。

勞工神聖の麵包

——民國八年秋、北京の思想狀況——

小 野 信 爾

一九一九年の雙十節は、中華民國になつて初めて大衆的に祝われた國慶であつた。官側が例年以上に慶祝に冷淡であつたのとは對照